



鑑賞ガイド

— 輪島塗 そのさき —

artisans & 輪島塗

輪島復興支援



公式サイト

tabby design
[編集・発行]
そこう美術館 2026年1月

輪島復興支援 artisans & 輪島塗 — そのさき —

2026年1月22日(木)～2月23日(月・祝)

そこう美術館 [横浜駅東口 そこう横浜店6階]
郵便番号 220-8510 横浜西区高島2-18-1 電話 045(465)5515 (美術館直通)
https://sogo-museum.jp/ X(@TWitter):@sogomuseum

「展覧会を通して、輪島塗の数多くの工程や超絶技巧を深く知り、未来へ繋ぎ、新たな発展を切り拓く糧となることを願います。」



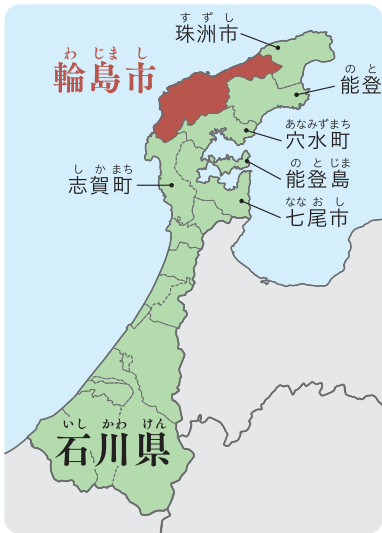
石川県立輪島漆芸技術研修所は漆芸技術の保存と継承のため1967年に設立にあたり松田先生は「芸は人なり」を基調とする教育方針のもと多くの卒業生を輩出しており、高度な技術の今後の発展や振興、研鑽の必要性を強調し設立から60年その使命を果たしています。研修所では重要無形文化財保持者(人間国宝)の先生方から直接技術を学ぶことができます。

漆芸を継承する

職人の手から手へ、多くの工程を経てつくられる輪島塗。石川県立輪島漆芸技術研修所を筆頭に、若い世代への技術の伝承や新たな活用方法の模索が進められています。

石川県輪島市

石川県の北西部にある輪島市は、豊かな緑と海に囲まれた場所。江戸時代には北前船の寄港地として栄え、海上交通によって調達した材料、豊かな土地が育んだ木々や地の粉、湿潤気候を活かして「漆器」が発達しました。



輪島市地図

輪島塗とは

海外で「Japan」と呼ばれる日本の漆器。

- ① 素地が木地であること
- ② 布着せをしていること
- ③ 地の粉下地であること

3つの条件を満たしている漆器が輪島塗と呼ばれ、重要無形文化財に指定されています。優美な加飾だけでなく、堅牢さを生む丁寧な工程が輪島塗の魅力です。



輪島塗の「漆」

漆とは、ウルシの木から取れる樹液(生漆)のことです。生漆を精製して塗料や接着剤として用います。強くて耐久性があります。輪島塗の漆は、かつては輪島でとれたものを使用していましたが、現在は全国の漆産地から集められます。特に岩手県浄法寺町の漆が国内最高峰と言われ貴重です。



浄法寺町でとれた漆には本物の証としての印が付けられています。慣れていないと漆の匂いだけでかぶれてしまう人もいます。

質がよく丈夫な漆器は、修理して使い続けることができる、「一生もの」。



輪島塗の「木材」

輪島塗の素になる器(木地)には、輪島で育つ能登ヒバ(アテ)という木が使われます。やわらかく、加工しやすい点が輪島塗に適しています。木を加工できる大きさに割る作業は「お天気が良い日」限定。機械は使わず手作業で行います。



「堅牢優美」な輪島塗ができるまで

土台を作る



木地
漆器の素になる木の器のこと。漆を塗る前に
椀、皿、重箱、盆などの形に成形されます。
指物、曲物、挽物・椀木地、
刳物といった技法があります。
木地ができたら「燻す」ことで殺菌・防虫をし、
劣化を防ぎ、安全な食器を作ります。



**さしもの
指物**
木を組み合わせて作ります。
繋ぎ目がわからないほど、
滑らかな感触。



**まげもの
曲物**
薄く切り出した木の板を
水に浸し、曲げて楕円などの
形を作ります。

**ひきもの
挽物**
轆轤を使い回転させることで
挽きながら椀を成形します。



**わんきじ
椀木地**
景色が透けて見えるほど
薄く削られた木地。
熟練した職人の
なせる技です。



**くりもの
刳物**
木をノミやカンナで削り出し
刳りぬいて作ります。

素地〈布着せ〉

椀の縁や薄く割れやすい部分に
麻布などの布を貼り付けて補強します。
木地と布とを密着させ乾燥させた後、
布の縁や重なったところを小刀で削り
凹凸がないように整えます。



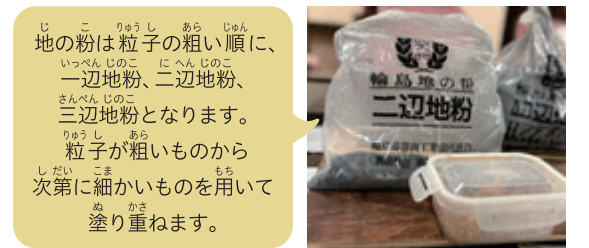
「堅牢」な輪島塗を作る 重要な工程の一つ。
漆器の耐久性を高め、ひび割れを防ぎます。



小刀
布専用の小刀で凹凸を整えます。

下地〈地の粉〉

木地ができたら、「地の粉」を用いて下地塗をします。
地の粉とは、植物プランクトンの一種である珪藻類が
堆積して化石になった珪藻土を、蒸し焼きにして
粉にしたもの。輪島塗固有の材料の一つです。



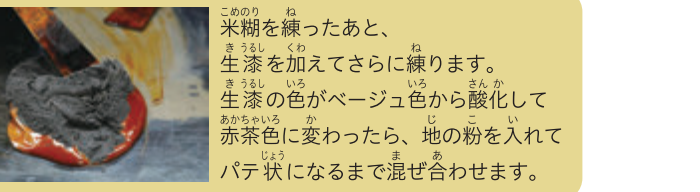
生漆に米糊と地の粉を混ぜたものを
何度も塗り重ねことで、
堅牢な下地になります。

研ぎ

素地に下地塗をしたら、砥石を用いて研ぎます。
一辺地塗りをしたら一辺地研ぎ、
二辺地塗りをしたら二辺地研ぎというように
塗りと研ぎの作業を地道に何度も繰り返します。



砥石
用途に応じて大きさの違う砥石を使います。

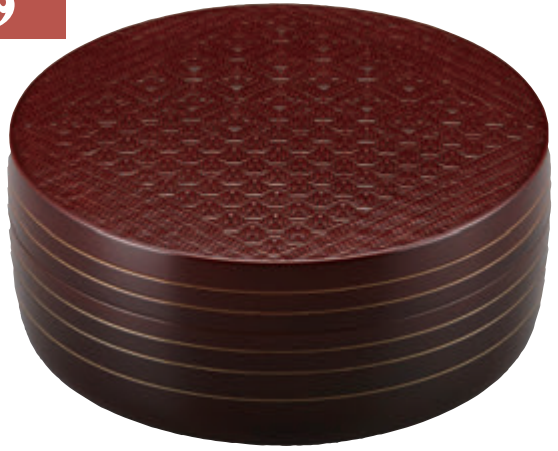


米糊を練ったあと、
生漆を加えてさらに練ります。
生漆の色がページ色から酸化して
赤茶色に変わったら、地の粉を入れて
パテ状になるまで混ぜ合わせます。

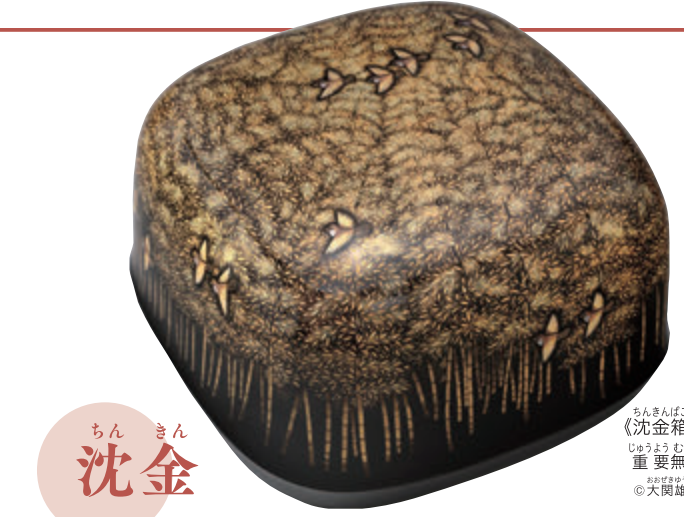
美しい装飾を施す

触れる展示に注目
会場には、手板という工程見本があります。
触って加飾の質感を感じてみましょう。

髹漆
刷毛や篋で漆を塗る、
漆塗の根幹となる重要な技法です。
下地・下塗・中塗・上塗の工程があります。
下地をつけては研ぐ、漆を塗っては研ぐを
何十回と繰り返し、艶やかで美しく、
丈夫な器になります。



《曲輪造 藍胎食籠》 小森邦衛
藍胎とは竹で編んで作った素地のこと。
竹を編んだ目が文様となって浮き出しています。



沈金
漆を塗ったところに「鑿」という刃物で模様を彫り、
漆を摺り込み、金箔を押し込んで模様を表します。
金銀の粉や色粉等が使用されることもあります。



《沈金箱「竹叢」》 前史雄
重要無形文化財「沈金」保持者
©大関建次郎

蒔絵
日本で独自に発達した技法。
漆で模様を描き、漆が固まる前に
金や銀などを粉にしたもの
(蒔絵粉)を蒔きつけると
漆が塗られた部分にだけ
蒔絵粉が付き、絵が表現できます。
仕上げには炭を使って
磨きをかけます。

《栗鼠に葡萄文蒔絵箱》 中野孝一
重要無形文化財「蒔絵」保持者

輪島塗は製造工程ごとに専門の職人が手がける分業制。職人の手から手へ繋がり、124もの工程を経てできあがります。

鑑賞ガイドでご紹介する工程は、輪島塗を代表する工程の一部。展示会場で、輪島塗を支える職人(artisans)の手間を惜しまぬ美意識をご覧ください。